

<シンポジウム 17>片頭痛の疼痛発生とその拡大進展をめぐる最先端の分子メカニズム

ねらい

座長 慶應義塾大学医学部神経内科

鈴木 則宏

鳥取大学医学部医学科脳神経医科学講座脳神経内科学分野 中島 健二

(臨床神経 2010;50:988)

国際頭痛分類の確立 (1988 年) とそれに続く改訂 (2004 年), そして片頭痛治療へのトリプタンの導入によって頭痛診療は最近 20 年間で全世界的に変貌を遂げた。それにともない, 頭痛診療の現場ではさまざまな種類の頭痛, とくに片頭痛に対する正確な理解と日進月歩進歩する頭痛に関する最新の知識の獲得が要求されるようになってきている。片頭痛の激しい疼痛の発生と拡大進展の機序は長らく謎であったが, 近年の研究の飛躍的な発展により, 遺伝子変異の関与, 発生器の存在, 皮質拡延性抑制の発生と三叉神経興奮との関係, 三叉神経節および三叉神経脊髄路核神経細胞の興奮機序と可塑性など, つぎつぎに興味深い新たな知見が報告されている。また,

これらの研究の発展にともないトリプタン系薬に次ぐ次世代の NMDA 受容体拮抗薬や CGRP 受容体拮抗薬などが臨床の場に登場しつつある。かつて血管性頭痛として脳血管に限局する疾患と捉えられてきた片頭痛は, もはや脳血管の疾患ではなく, むしろ血管の病態は 2 次的であり, 中枢神経の異常が病態の中核をなすことが一般的な概念となっている。

本シンポジウムでは, これら片頭痛の疼痛発生と疼痛伝達のメカニズムの最新の知見をまとめ, そして整理することによって, 片頭痛の病態研究の最前線を理解していただくことをねらいとする。